

「方寸匕」は「方寸匕」が正しい

中醫クリニック・コタカ 小高 修司

「方寸匕」は計量の詞としてよく見られる。たとえば『傷寒論』五苓散方の処方部分に「皮を去った猪苓十八銖、澤瀉一兩六銖、白朮十八銖、茯苓十八銖、皮を去った桂枝半兩の右五味を搗いて散と為し、白飲を以て和す。方寸匕を服し、日に三服す」と書かれていることは周知である。これは現伝の宋板『傷寒論』の最善本である明趙開美本（療原刊）においても同じである。


「方寸匕」は一般に「ホウスン匕」と読まれ、一寸四方の「匕」の量と考えられている。ところがこの度、『素問』の条文を検討するなかで、「化」の意味を検証すべく白川静『説文新義』を調べたところ、化の初文は「匕」であり、読みは『角川大字源』によれば「ヒン」または「カ（クッ）」であった。そして一般に「匕」と呼ばせるためには「匕（もしくは匕）」と書くべきで、一般に見られる諸本が「匕」と書くのは意味が通じず誤りであると考えられた。

ちなみに「匕」は「匕」とも書くが、両字共に正字である。そしてこの字は上記の『説文新義』によれば、初文として種々の字が元にあるという。その元の字を列記すれば①妣の初文②匕柶の象形の字③匕首の象をなすもの④牡牝の牝に従うものなど、それぞれ初形・初義を異にするものが、隸釋の形が近いために混じたのだらうと言う。①は「比」に作り、人の下體のやや屈曲した形である。②に従う字に「匙」がある。

結論を述べれば、ここから想像できるように、まさに「ホウスン匕」は「方寸匙」、つまり「一寸四方の匙」の意であろうし、さすればこの「方寸匕」を用いなければならないことになる。

それ以上の意味がこの字にないのだろうか？「匕」字をもう少し見てみよう。匕部の字を『説文解字』（後漢・許慎著、部首別の最初の字書、略して『説文』）で見ると、まず「頃」がある。「頃」を時に「頃」に作ったもので、祝告して靈を迎え、靈が降格するのに対し頃首する意で、その祝冊を省略した形が頃である。

また同じ匕部の字として「良」がある。『説文』に「良は很なり」とあり、「很は行くに難きなり」とあるから、『易』伝では「良は止まるなり」とし、さらに良卦から出て、『釋名』（後漢、劉熙が『爾雅』に倣って著した字書）に「良は限なり」とある。限は聖

梯を示す  の前に掲げ、その下に人の ^{ひさまづ} 却く形を描く。つまり靈の降りる聖梯を護るため、その前に邪眼を掲げ、人の侵入を防ぐ意を示す。良はその聖梯を略した形であるが、字としては聖梯が有ってこそその意象を成しうるので、良は限の省文とみて良い。

さて再び「化」に話を戻す。『説文』ではこの字は人部（つまりにんべん）でなく、匕部の字である。それは匕字が化の初文だからであろう。『説文新義』によれば、『正義』曰く「胎孕を化と為す」。また『呂氏春秋』過理篇に「孕婦を剖いて其の化を觀る」とあ

るは此れ匕の本義。人の初めて生まれるは倒垂して下るなり。胎孕は見るべからず、故に象は其の初生なり。】とあり、胎孕の象によって化の義を示すとす。つまり化は人の死を言う。ものはみな死によって化し、また新しい生に変化する。そういう変化の求めるところに、道家や易の思想は成立したが、字はおそらくそれ以前より存したのであろう。同じく人の死を意味する「眞」字は経書にその字が見えず老荘以後好んで用いられるが、その義も後起のものであろう。同じく匕部の字である。このように人の死との関連を意味する「匕」を用いた「方寸匕」では意味が通じないことが明らかである。

さて「方」の字の原義を見ると、人を架してこれを祭梟とする意味である。これを以て邪霊を放ち呵禁するを「放」といい、これを以て厭勝とするを「防」という。防とは神の陟降（＝昇降のこと）する聖梯の前に方を置いて防禁するをいう。ことに辺境の異民族に対し呪禁する地を「邊」といい「塞」という。またその地方を「方」といい、その地にある異民族を「某方(土方、馬方など)」と称した。

このように「方寸」の意味する一寸四方の意味は甲骨金文には見られない。だが「方」の四方の意味での用例は既に『孟子』に見られ、後漢代の医書である『傷寒論』などに「方寸匕」としての用例が有ることに問題はない。ちなみに方寸には「僅かな広さ、大きさ」や「ところ」という意味もあるが、いずれもここでは妥当しないと考えて良いであろう。

このように「匕」や「方」の字に聖霊との関わりを示す原義や関連字が多く見られることも、もしかすると「方寸匕」に多少の靈的な要素を含ませ、「鑿」の字の如く、まじない要素を持っていた原始の医薬の関連用語であったのかもしれない。

「寸」は『説文』に「十分なり」とある。即ち「一個指頭の寛度を一寸と為す」という意味と、「寸口の称」の二義があるという。だが寸口は量度法が発展してからの考えとする見方もある。いずれにしろ寸には長さの意味以外にはなさそうである。

なお世上に「方寸上」が正しいとする説もあるようだが、「匕」に匙の意味がある以上、豈論ず可けん哉。